

えほんたいこうき

# 絵本太功記

## 〔解説〕

寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

## 〔あらすじ〕

主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。

光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心に感じ自刃しようと思しますが、四王天と息子十次郎に諫められ、

改めて天下取りの戦へと向かいます。

尼ヶ崎のさつきの閑居へ、光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつた久吉が一夜の宿を乞うのです。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。

〔**尼ヶ崎の段**〕 最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのです。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

# 尼ヶ崎の段

一間へ入りにけり。

残る蒼の花一つ、水上げかねし風情にて、思案投げ  
首しをるゝばかり、やう／＼、涙押しとどめ。

「母様にも祖母様にも、これ今生の暇乞ひ。この身の  
願ひ叶ふたれば、思ひ置く事さらになし。十八年がそ  
の間御恩は海山かへがたし。討死するは武士の習ひと  
思し召し分けられて、先立つ不孝は赦してたべ。二つ  
にはまた初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互ひの身の幸  
せ。わしが事は思ひ切り、他家へ縁つきして下され。  
討死と聞くならば、さこそ嘆かん不便や」

と、孝と恋との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立ち聞  
く涙転び出で、『わつ』とばかりに泣き出だせば、『は  
つ』と驚き口に手を当て、

「ア、コレ／＼声が高い初菊殿。さては様子を」

「アイ、残らず聞いてをりました。夫の討死遊ばすを、  
妻が知らないでなんとせう。二世も三世も女夫ぢやと思  
うてゐるに情けない。盃せぬが幸せとは、あんまり聞  
こえぬ光義様。祝言さへも済まぬうち、討死とは曲が  
ない。わしやなんぼうでも殺しはせぬ。思ひ留つて給  
はれ」

と、縋り嘆けば

「ア、コレ、こなたも武士の娘ぢやないか。十次郎が  
討死はかねての覚悟。祖母様に泣き顔見せ、もし悟ら  
れたら未来永々縁切るぞや」

「エ、」

「サア、とかう言ふうち時刻が延びる。その鎧櫃こゝ  
へ、こゝへ」

「アイ、アイ」

「サ早う。時延びる程不覚のもと。エ、聞分けない」と叱られて、

「いとしい夫が討死の、門出の物具つけるのが、どう急がるゝものぞいの」

と泣く／＼取り出す緋緘の、鎧の袖に降りかゝる、雨か涙の母親は、白木に土器白髪の婆、長柄の銚子蝶花形、門出を祝ふ熨斗昆布、結ぶは親と小手躰当、六具かたむる三々九度、この世の縁や割小ぎね、猪首に着なす鋏形の、あたり眩ゆきいでたちは、さはやかなりしその骨柄。

「ヲ、あつぱれ武者ぶり勇ましゝ。高名手柄を見るやうな、祝言と出陣を一緒の盃。サア／＼はやう、めでたい／＼嫁御寮」

と、悦ぶ程なほいや増す名残り『こんな殿御を持ちながら、これが別れの盃か』と、悲しさ隠す笑ひ顔、

「随分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」

と、跡は得言はず喰ひしぼる、胸は八千代の玉椿、散りて果敢なき心根を察しやつたる十次郎、包む涙の忍びの緒、絞りかねたるばかりなり。哀れをこゝに、吹き送る、風が持て来る攻め大鼓、気を取り直しつゝ立ち上り、

「いづれもさらば」

と言ひ捨てゝ、思ひ切つたる鎧の袖行方知らずなりにけり。

「ノウ悲しや」

と泣き入る初菊、母も操も顔見合はせ、

「祖母様」

「嫁女、可愛や、あつたら武士を、むぎ／＼殺しにやりました。ノウ初菊。十次郎が討死の出陣とは知りながら、なまなか止めて主殺しの憂き死恥をさらさうよ

り、健気な討死させんため、祝言によそへて盃をさし

たのは、暇乞ひやら二つには心残りのないやうと、思ひ余つた三々九度。祖母が心のせつなさを、推量しや」

とばかりにて、初めて明す老母の節義、聞く初菊も母親も、一度にどうと伏し転び、前後不覚に泣き叫ぶ。

襖押明け何気なうつか／＼出づる以前の旅僧

「コレ／＼かみさま、風呂の湯が沸きました。どなたぞ、お入りなされませ」

と言ふにこなたは泣き顔隠し、

「ヲ、それは御苦勞、さりながら年寄に新湯は毒。跡は若い女子ども、マアお先へ御出家から」

「いかさま、湯の辞儀は水とやら、左様ならば御遠慮なし、お先へ参る」

と立上がれば、三人は涙押包み、奥の仏間と湯殿口入るや月漏る片庇、こゝに苳り取る真柴垣、夕顔棚のこ

なたより、現はれ出でたる武智光秀。

「必定、久吉この家に忍びあるこそ究竟一。たゞ一討ち」

と氣は張り弓、心は矢竹藪垣の、見越しの竹をひつそぎ鎖、小田の蛙の鳴く音をばとよめて『敵に悟られじ』

と、差し足抜き足窺ひ寄る。聞こゆる物音『心得たり』

と、突込む手練の鎖先に、『わつ』と玉ぎる女の泣き声、

『合点行かず』と引出す手負ひ、真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒、

「ヤ、ヤ、／＼、こは母人か、しなしたり。残念至極」とばかりにて、さすかの武智も仰天し、たゞ呆然たる

ばかりなり。声聞きつけて駆け出る操、初菊もろとも走り出で、

「ノウ母様か情けない。このあり様は何事」と縋り嘆けば、目を見開き、

「嘆くまい、嘆くまい。内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類。かく成り果つるは理の当然。系図正しきわが家を、逆賊非道の名に穢す、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて高名顔、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の通さへ立たば、もつさう飯の切り米も、百万石に優るぞや。おのれが心たゞ一つで、験しは目前これを見よ。武士の命を断つ、刃も多この様な、引つそぎ竹の猪突き鐘。主を殺した天罰の、報ひは親にもこのとおり」

と、鐘の穂先に手をかけて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負ひ、妻は涙にむせ返り、

「コレ見たまへ光秀殿、軍の門出にくれぐも、お諫め申したその時に、思ひ止つて給はらば、かうした嘆き

はあるまいに、知らぬ事とは言ひながら、現在母御手にかけて、殺すといふは何事ぞいなう。せめて母御の御最期に、『善心に立帰る』と、たつた一言聞かしてたべ。拝むわいの」

と手を合はし、諫めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鑑曇りなき、涙に誠あらはせり。